

今週の為替相場見通し(2021年12月13日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		112.75 ~ 113.95	113.40	113.00 ~ 114.50
ユーロ	(ドル)		1.1228 ~ 1.1355	1.1316	1.1150 ~ 1.1400
(1ユーロ=)	(円)		127.53 ~ 129.11	128.33	126.50 ~ 129.50
英ポンド	(ドル)		1.3162 ~ 1.3289	1.3271	1.3100 ~ 1.3300
(1英ポンド=)	(円)	*	149.14 ~ 151.13	150.53	148.50 ~ 151.00
豪ドル	(ドル)		0.6995 ~ 0.7187	0.7174	0.7070 ~ 0.7270
(1豪ドル=)	(円)	*	78.93 ~ 81.72	81.33	80.00 ~ 82.70

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 113.00 ~ 114.50 円

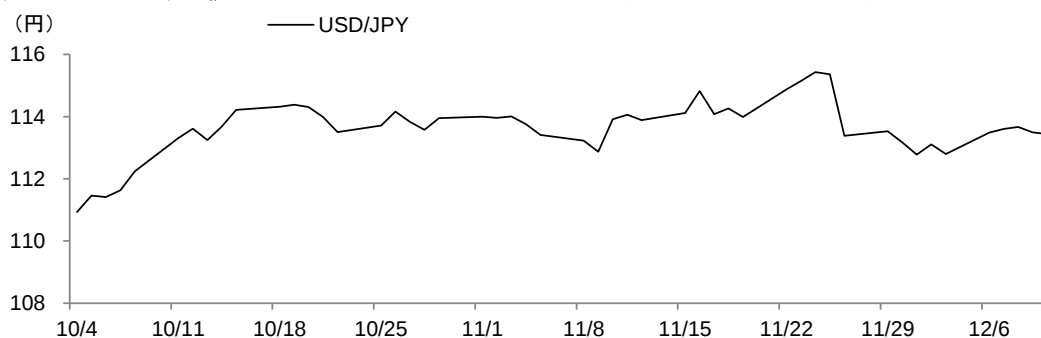
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週半ばにかけて上昇した。週初6日、113.05円付近でオープンしたドル/円はオミクロン株を巡る懸念が後退、先々週末からのリスク回避の動きが和らぎ、株式市場は回復、米長期金利が急上昇しドル/円も113円台半ばまで値を伸ばした。7日、ドル/円はオミクロン株への警戒感が薄れる中、前日のリスク選好地合いが継続し、113円台後半まで上昇も後半にかけては伸び悩んだ。8日、ドル/円は海外時間に米製薬会社がワクチンを3回接種すればオミクロン株を抑制可能という試験結果を公表するとリスク選好の動きが加速し、一時週高値の113.95円まで急伸。その後ドル/円は米長期金利低下に反落も下値は底堅く、113円台半ばでの揉み合いの展開となった。9日、ドル/円はオープン直後に上値を伸ばすも、株式市場の軟調推移と米長期金利の低下を受け113円台前半まで下落。その後は海外時間に発表の米新規失業保険申請件数の結果が市場予想を下回ったことでドル買いが優勢となり、その後は113円台半ばまで値を戻した。週末10日は、ドル/円は113円台後半まで一時上昇する場面も見られたが、113円台前半に押し戻されてクローズした。米11月CPIの結果は約40年ぶりの高水準となったものの予想比を上回るものでなかったことや、指標発表前にバイデン大統領より今回の指標結果には直近に見られるインフレの改善は含まれないであろう旨の発言があり早期利上げ期待に水を差した。

今週のドル/円相場は堅調推移を予想している。今週は市場注目のFOMCが14日(火)、15日(水)に予定されている。昨今のインフレ率の高進を受け、先月末の議会証言にてパウエルFRB議長はインフレ率の上昇が一過性であるとの見方を修正した。また、テーパリングの早期終了の必要性についても言及しており、本会合では2022年6月終了予定のテーパリング終了時期が早まるのか注目が集まる。早めにテーパリングが終了することで早期の利上げが可能となる。米国はインフレ率の持続的高進に対処するための早期利上げへの準備を進めると見ており、ドルの堅調推移が継続するだろう。また、今週は14日(火)に米11月PPI、15日(水)に米11月小売売上高の発表が予定されており、米国のインフレや消費の動向が確認できる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/6 ~ 12/10)の値動き: 安値 112.75 円 高値 113.95 円 終値 113.40 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.1150 ~ 1.1400 126.50 ~ 129.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は1.13を挟んでもみ合う展開。週初6日、1.1304でオープン。オミクロン株の症状が軽症に留まるとの見方や、中国が事前予想通り預金準備率を引き下げたこともあり、過度なリスクオフの動きが後退。南アフリカ共和国からの感染症状に関する初期データなども材料視され、ドル買い地合いの展開となると、ユーロ/ドルはニューヨーク時間に1.12台半ばまで下落した。7日は、独12月ZEW景気期待指数が予想を上回ると、ユーロが買われる場面もあったが、1.13を目前に反落。全般的なリスクオン動きの中、ユーロの上値の重さが意識されると1.12台半ばまで押し戻された。その後、更にユーロ売りが強まると、短期的なストップを巻き込み週安値1.1228まで下落したものの、一巡後は1.125付近まで値を戻した。週央8日は、米製薬会社からワクチン3回接種がオミクロン株に有効との見解を示したことでリスクオン地合い。リスクオフのドル買いの巻き戻しからか、ドル売り優勢となると、ユーロ/ドルは1.13台を回復し週高値1.1355まで上昇した。翌9日、オミクロン株の感染拡大のニュースを受け、株式市場が軟調に推移する展開にユーロ/ドルは上値の重い展開となり、1.1310付近までじりじりと下落。その後、米経済指標が良好な結果となると、ドル買い優勢の展開となりユーロ/ドルは1.13割れ。週末、米11月CPIへの期待感も相俟ってドル買いが継続し1.1270付近まで下落。米11月CPIの結果を受け米金利が下落すると1.13台を回復し、1.1316で越週した。

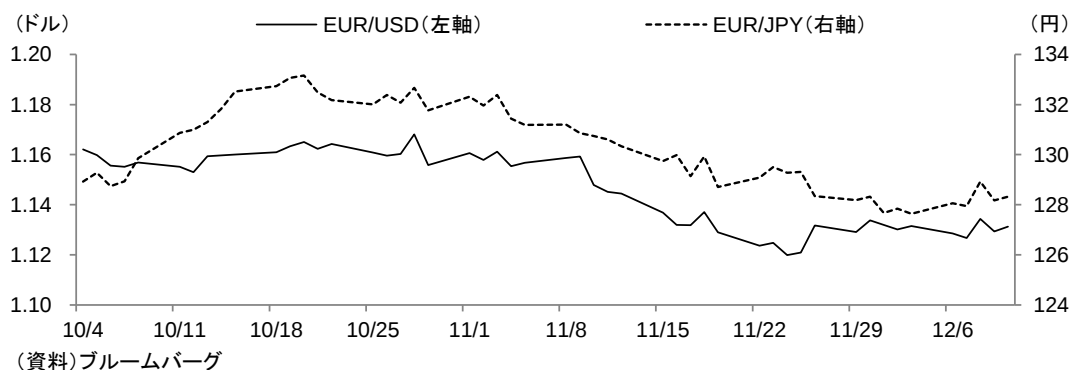
今週のユーロ相場は軟調な展開を予想。オミクロン株への過度な警戒感は後退しているものの、欧州域内でも続々と同変異株の感染が確認されており、感染拡大に伴う経済への悪影響が懸念される。こうした中、16日(木)にはECB政策理事会を控える。ECBはコロナ感染拡大の当初に導入したPEPPを来年3月に終了する方針を示していたが、オミクロン株の登場によって、足元では正常化プロセスの遅延が懸念されている。ラガルドECB総裁からはPEPPを終了させる方針が示されているものの、先行き不透明感が強い中で、大幅なタカ派シフトは想定し難い。一方で14日(火)から米国ではFOMCが開催される。パウエルFRB議長から持続的なインフレリスクへの懸念が示されており、テーパリングの加速へと動きだす見込み。米金融政策の正常化に拍車がかかる米国と正常化を進めたくても進められない欧州との対比が鮮明となれば、ユーロは素直に下落する展開を予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/6 ~ 12/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1228 高値 1.1355 終値 1.1316

(対円) 安値 127.53 高値 129.11 終値 128.33



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ: 1.3100 ~ 1.3300 148.50 ~ 151.00 円

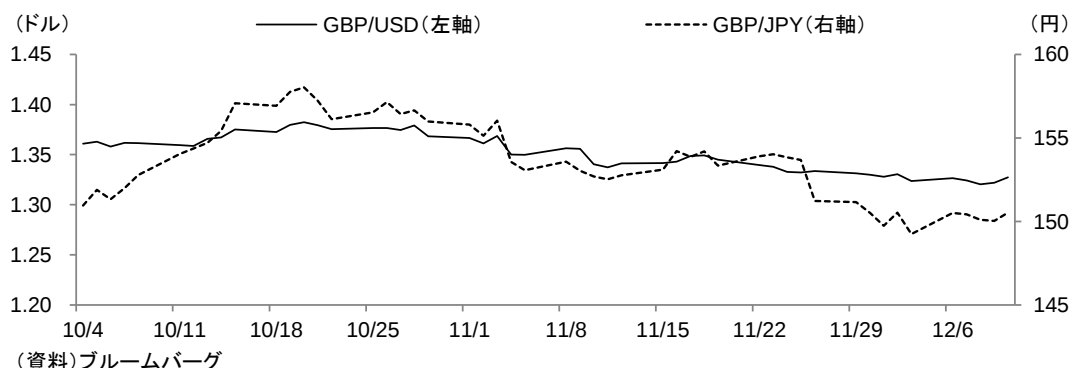
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、動意も方向感も欠いた小動き。対ドルでは軟調気味の横ばいを支配的としながら、週引け直前に小反発。対円では上昇が先行したものの、その後、週引けまで軟調気味の横ばい。対ユーロでは、堅調気味の滑り出しから、明確な下押し、反発と、例外的に値幅を出したが、これらはユーロ側の値動きが中心で、ポンド側の要因には乏しかった。週明け直後の主要通貨市場は、3日発表された米11月失業率の低下などを反映したドル堅調が先行したが、ポンドは、ドル同様「利上げが近い」通貨と位置付けられたのか、対ドルで横ばい、対円、対ユーロでは堅調が先行した。8日、ポンドは対ユーロを中心に水準を切り下げたが、この局面のユーロ高の要因は定かでなかったし、長続きもしなかった(翌9日には全面反落)。8日には欧州中銀デギンドス副総裁の「オミクロン株が景気回復を頓挫させることはない」「現在の高インフレは数か月前に想定されたよりも長く続く可能性がある」などと、景気に強気、金融引締めにも積極的と読める発言をしていたが、前後して、フィンランド中銀レーン総裁やシュナーベル理事が金融引締めにも消極的な発言をしており、ユーロがデギンドス副総裁の発言だけを殊更材料視したと考えるには無理が感じられた。ポンドが全般に軟調推移を支配的とした要因を敢えて挙げるとしたら、オミクロン株蔓延を受けた英中銀利上げ観測の後退(後述)と、与党保守党の相次ぐスキャンダルを受けた英政局の先行き不透明感(後述)を指摘することはできたかもしれない。

今週の英ポンド相場は、神経質な膠着の先行から、週後半、注目イベントの結果次第で相場が振れる展開を予想する。16日(木)には、英中銀金融政策委員会における利上げの有無が注目されるが、奇しくも同日、スキャンダル(雇用主のために議員としてロビー活動をした倫理規定違反)で辞任したパターソン議員(与党保守党)の空席を争う補選も実施される。当該北シュロップシャー選挙区は、保守党の「牙城」と位置付けられており、パターソン議員も、19年総選挙では63%近い得票を得て当選していた。ジョンソン政権は、ここもと、他にもいくつものスキャンダルを抱えており、直近では「クリスマスパーティー」事件(昨年12月、政府が厳しい行動制限＝ロックダウンを導入した真っ最中に、首相官邸で40人規模のクリスマスパーティーが実施された事実が発覚)で世論の注目を集めている。いずれのスキャンダルも、事件そのものよりも、事件をもみつぶそうとしたり、覆い隠したりしたジョンソン首相の姿勢が厳しい批判を浴びている。万が一にも、保守党が補選で敗れ、議席を失うことになれば、保守党内部からも、ジョンソン首相に対する辞任圧力が強まる可能性が考えられる。当該選挙結果が判明するのは、16日(木)の現地時間夜半になると見込まれるが、その前に発表される、英中銀金融政策委員会の結果も注目。市場予想は、従来、基準金利の15bp利上げ(→0.25%)と金利据え置きで真っ二つに割れていたが、ここにきて据え置き予想が優勢になったのは、オミクロン株の蔓延による英景気先行き不透明感を反映した動きだろう。また、8日(水)、ワクチン接種でも、金融引締めでも先行していたカナダ(中銀)が利上げを見送った事実も、金利据え置きを予想する根拠のひとつとなろう。予想の中心が据え置きに移った結果、値幅が出るとしたら利上げを受けたポンド上昇ということになるが、仮に予想通り据え置き決定がされたとしても、多少はポンドが売り込まれる余地もあるのではなかろうか。

(3)先週末までの相場の推移

先週(12/6 ~12/10)の値動き: (対ドル) 安値 1.3162 高値 1.3289 終値 1.3271
(対円) 安値 149.14 高値 151.13 終値 150.53



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7070 ~ 0.7270 80.00 ~ 82.70 円

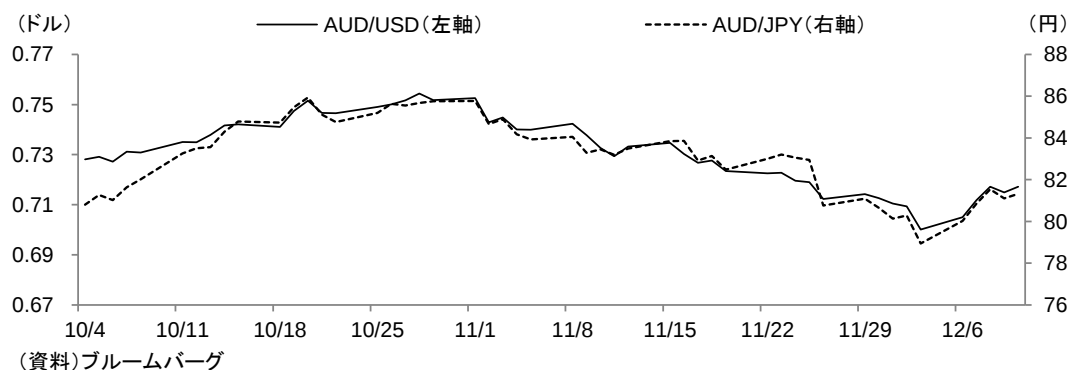
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は一旦0.70割れから、0.71台後半まで上昇。6日、週末にファウチ米国立アレルギー感染症所長がオミクロン株の重症度判断を巡り、初期の情報に基づく「重症化の度合いはそれほど高くはないようだ」とコメントしたことが、リスクオフムードを若干後退させた。又、中国人民銀行が銀行の預金準備率(RRR)を15日から0.5ポイント引き下げると発表したことも支援材料となり、株価は反発、米国債は反落、豪ドルは0.7050近辺まで上昇した。7日、RBA理事会では金融政策据え置きが決定され、テーパリング加速等に関する新たな手がかりは出てこなかった。ただ、オミクロン変異種による景気腰折れは想定しないとの記述に加え、前回の声明文で記載されていた「2023年後半までにインフレ率が目標とする2.5%に達する」との記述が削除されたことが若干タカ派的と解釈され、豪ドルは発表後から買いで反応。その後、コロナ抗体治療薬やワクチンに関するポジティブな報道を背景に、オミクロン株への警戒感が和らぎ、米株が大幅高の展開となる中、豪ドルはじりじりと上昇を続け0.7120近辺で引けた。8日、オミクロン株懸念のアンワインドが継続。米JOLT求人数が予想外に増加したこともリスクオンの流れを下支えし、株高・債券安の展開に。豪ドルはこの流れを背景に0.7170近辺まで上昇。9日、米11月CPIの発表を翌日に控え、警戒感から株価が小幅下落し、豪ドルは0.7150近辺まで下落した。10日、注目された米11月CPIはヘッドラインこそ0.8%（前月比）と予想をやや上回ったものの、コアは0.5%（前月比）と予想と一致。又どちらも前回から低下し、事前に警戒されていた程強い結果とならなかったことから、米ドル売りが強まり、豪ドルは一時0.7180近辺まで上昇した。その後小幅に売り戻され0.7170近辺で越週。

今週の豪ドルは下値固めの展開を予想する。今週は主要中央銀行による金融政策決定会合が予定されており、オミクロン株を受けた経済見通しの修正および、政策の相違に注目が集まる。特に15日(水)のFOMCが大きく注目され、テーパリング加速の発表が既にメインシナリオとなっている。オミクロン株を巡る初期段階の報道では楽観的な内容が多く、先週は行き過ぎた懸念の巻き戻しの動きが一巡し、豪ドルは0.71台半ばで落ち着きを見せている。今後更により確度の高い分析結果が出てくることが予想されるが、楽観的な結果が既に市場にある程度織り込まれているため、ネガティブな結果が出てきた場合、再び大きくリスクオフの調整が入る可能性には留意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/6 ~ 12/10)の値動き: (対ドル) 安値 0.6995 高値 0.7187 終値 0.7174
(対円) 安値 78.93 高値 81.72 終値 81.33



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。